

学位論文題名

フランス現代思想とメルロ＝ポンティ

学位論文内容の要旨

はじめに—フランス唯心論の伝統

メルロ＝ポンティは後期フッサールの思想を継承し発展させた現象学の哲学者である。これが学界の一般的な評価である。これに対して、本論文の意図するところは、メルロ＝ポンティの哲学をベルクソン哲学を頂点とするフランス唯心論(spiritualisme)の伝統において位置づけ、この観点からメルロ＝ポンティの現象学受容の意味を問い、さらには両者における科学と哲学の関係の理解を「実証的形而上学」として定位するところにある。

第一部 ベルクソン

序論 両義性の露呈

ベルクソンは心身の合一に根ざす諸概念、たとえば時間(空間化された時間と純粹持続)、再認(自動的再認と注意的再認)、記憶(習慣-記憶と像-記憶)、因果性(物理的因果性と心理学的因果性)などの両義性(ambiguïté)に至るところで露呈させたが、それらを主題的に解明することはなかった。

第一章 ベルクソンにおける心身問題—『物質と記憶』を中心に—

経験論者は「記憶」を印象の再生とみなし、それを「感覚」へと還元する。同様に、我々は「記憶」を通常、現在における過去の再生と反復と考える。我々が「進行」である意識を、静止した「もの」で置き換えようとするからである。心理学者はこうした我々のうちにある不可避の傾向に従順であるがゆえに、記憶内容が大腦のうちに局在していると考える。ベルクソンは記憶の大腦局在説の批判をとおして、「記憶」が「再生」や「反復」とは本性的に異なる「創造」であることを明らかにする。このように、ベルクソンは純粹記憶(心)と純粹知覚(物質)の本性的差異を強調するが、メルロ＝ポンティから見れば、これは二元論への退歩にほかならない。

第二章 経験論哲学とベルクソン—因果性の概念を中心に—

一方では、因果性の概念は「物理学的因果性」として自然の普遍法則であり、ある事象に続いて他の事象が必然的に生起するという「明確な決定」を意味する。他方、それは元来ある変化の帰属先を問う概念でもあり、そこに含まれるのは「能動的な力」である。後者は心理学的決定論を主張する人々によって「心理学的因果性」と呼ばれてきた。しかし、心理状態は過ぎ去ることを本質とするから、物理的状态のように同一の状態を認めることは不可能である。したがって、

物理的事物に対すると同様に、心理状態に因果性を主張することはできない。「心理学的因果性」と「物理学的因果性」との間には本性的な差異が存在する。

第三章 合理主義の伝統とベルクソン— 因果性と創造 —

『創造的進化』で体系的に展開されるベルクソンの形而上学の背景には、因果性に対する徹底した省察がある。ベルクソンによれば、マールブランシュはデカルトのいう心身の実在的区別を認め、それらの相互作用を認めなかった点で正しい。しかし、彼はこれら二つの「実体の共存」という観念が精神および身体という個々の観念を凌駕する観念であることを見なかった。デカルトのいうように、心身の結合は「本源的概念」(notions primitives)であり、心身合一は他に還元できない事実である。したがって、心理学的因果性は物理的因果性と本性的に異なり、正しくは「創造」と呼ばれなければならない。ベルクソンは合理主義の伝統ではその実在性を認められることがなかった「時間」のうちに心身合一の根拠を見出し、「創造」という原理を与えたのである。

第二部 メルロ=ポンティ

序論 自己を語る両義性

ジャンケレヴィッチの指摘するように、ベルクソン哲学において身体は精神にとって「器官-障害」(organe-obstacle)という両義的な位置を占める。これはベルクソン哲学におけるもっとも含蓄のある思想である。しかし、メルロ=ポンティはベルクソン哲学が未だ二元論的枠組みに留まっており、心身の両義的な関係を十分に解明するに至っていないと批判する。

第一章 メルロ=ポンティにおける心身問題—有限性の哲学—

志向性はブレンターノにとって物理現象の因果関係に対立する心理現象の根本原則であった。これとは対照的に、メルロ=ポンティは志向性をこうした二元論的枠組みを積極的に解体する原則として解釈する。意識の志向的構造は受肉した精神がとる必然的な形式であり、心身合一という不可分な全体からの差異化を意味する。精神盲という疾患は意識の「内容」にも「形式」にも一元化されはしない。視覚の障害は精神盲の機会原因にすぎないのであり、精神の障害は視覚を越え出て主体の総体的な存在にまで及ぶ。他方、その名称が示すように、障害は明らかに視覚的発祥を示す。この意味で、純粋に意識の「形式」のみが問題なのではない。メルロ=ポンティは志向性のうちに「内容」と「形式」との弁証法を見出し、超越論的主観性の本質的な構造形式をア・ポステリオリなア・プリオリとして理解するのである。

第二章 サルトルとメルロ=ポンティ—非措定的コギトと黙せるコギト—

サルトルにとって、意識は何ものかへと向かってたえず自らを乗り越えて行く自己超越の運動であり、「非措定的コギト」によって「反省の可能性」と「状況の事実性」を不可分なものとして把握しようとした。他方、メルロ=ポンティが「黙せるコギト」という両義的な言い回しによって着目したのは、「反省」のうちに介在する「表現」という契機であった。知覚の主体である非人称的「ひと」(on)は身体を通して存在する「自然的主体」である。幻影肢の症例が示すように、意識の証言は根本的に両義的であり、コギトがコギトとなるのは自己自身を表現した時のみであ

る。このような「黙せるコギト」の到達する自由は「無差別の自由」を批判し、「深層の自我」と「表層の自我」という自我の二側面の関係のうちに「具体的自由」のあり方を究明しようとしたベルクソンの『試論』の自由に一致する。

第三章 メルロ=ポンティにおける自由の概念

「絶対的自由」を主張するサルトルにとって、フロイトの無意識は自由の刑から逃亡しようと試みる意識の自己欺瞞的あり方と見なされた。反対に、メルロ=ポンティはフロイトの無意識を我々の「始元的意識」と見なして、彼の学説を「具体的な自由」の哲学として把握しようとする。ベルクソンは選択の自由を回顧的錯覚とみなし、自由は意識のうちに身を置くことによってしか把握できないとしたが、これには自由を「自発性の自由」や本能の発現と混同するものであると批判された。失語症や言語障害の科学的研究を通して習慣や記憶の新しい理論を作り上げるという点において、ベルクソン哲学とフロイト理論との並行関係が指摘されたからである。しかし、メルロ=ポンティはフロイト理論を人間を本能の束と見なす機械論ではなく、自律と依存という人間の本来的条件に基づいたひとつの形而上学と見なすことによって、こうした並行関係のうちにベルクソン哲学を「具体的自由の哲学」として再生させる方途を見出した。

第四章 超越論哲学とメルロ=ポンティ

メルロ=ポンティの哲学的反省をもっとも強く動機づけたものはゲシュタルト心理学である。メルロ=ポンティはフッサールの基礎づけ主義を拒否し、同時にその「静態的現象学」から「発生的現象学」への展開のうちに、現象学とゲシュタルト心理学の相互浸透の関係を見出した。ここから、超越論的主観性が制度化された意識であったこと、フッサール現象学が歴史主義の批判から出発したが、皮肉にも歴史という時間性を還元不可能な次元として露呈させたことが明らかになる。

おわりに—実証的形而上学

本研究では、ベルクソンの哲学を「実証的形而上学」として把握し、メルロ=ポンティの哲学を同じ精神的を継承するものとして提示した。実証的形而上学とは、経験の具体性と哲学的反省の厳密性との統一を意味する。心身合一の相を解明するには、まさに合一という具体的経験に触れることが必要であるが、それは哲学が直接の対象とする諸概念の彼方に存在するから、哲学は諸科学の成果に依拠せざるをえない。他方、諸科学は諸現象間の物理的因果関係のみに注目し、そこに心的なものを見出そうとはしない。それゆえ、哲学は科学批判の武器として哲学的反省の厳密性、すなわち心身の概念的区別を徹底して維持することが必要になるのである。

また、このような科学と哲学の関係の理解は、デカルトからコントを経て現代に至るフランス哲学の基本的特徴の一つでもある。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 坂 井 昭 宏

副 査 助 教 授 佐 藤 淳 二

副 査 助 教 授 石 原 孝 二

学 位 論 文 題 名

フランス現代思想とメルロ＝ポンティ

メルロ＝ポンティは後期フッサールの思想を継承し発展させた現象学の哲学者である、というのが、学界の一般的な評価である。これに対して、本論文はメルロ＝ポンティの哲学をベルクソン哲学の諸主題との比較を通して理解し、フランス唯心論の伝統において位置づけ評価しようとする。唯心論とは、物質に対する精神の独自性と優位を主張する哲学的立場を意味するが、このコンテキストではむしろ生命という次元における心身の合一を前提にしたうえで、機械論的自然に対する生命の合目的的活動の優位と、物質に対する精神的なものの独自性を強調する立場として理解される。しかし、自然と精神との統一性を主張することは、それ自体が精神を自然に埋没させてその独自性を見失うことであり、またその独立性を強調することは二元論への後退を意味する。

メルロ＝ポンティのこの伝統における新たな貢献は、「構造」や「ゲシュタルト」という概念によって、精神（心）と自然（身体）との統一性と心的秩序の独自性とを同時に把握しようとした点に求められる。ベルクソンとの関係でいえば、彼はこうした心身の合一に根ざす諸概念の両義性（ambiguïté）、すなわち「時間」の両義性、「再認」の両義性、「記憶」の両義性、「習慣」の両義性、「因果性」の両義性などを露呈させたが、その二元論的傾向のゆえにこれらの両義性を十分に解明するに至らなかった。これに対して、メルロ＝ポンティの哲学の積極的意義はそうした両義性の解明を自らの課題としたところに求められる。

メルロ＝ポンティはベルクソン哲学に内在する二元論的傾向から脱却するために現象学に依拠した。第一に、ベルクソンには「受肉した精神」という観念と「超意識」つまり身体をもたない精神という観念が共存しており、これがベルクソンのテキストを統一的理解を妨げた。メルロ＝ポンティは現象学の「志向性」概念に依拠して、ベルクソンのいう「前駆的形成」を身体の運動志向性として批判的に継承し、同時に心身合一の立場から「志向性」をもって「受肉した精神」のもつ必然的形式とした。

第二に、ベルクソンは事物と表象の間にある「イマージュ」を哲学的考察の出発点に据えた。

しかし、ベルクソンにあっては、イマージュの織りなす世界が客観的世界として前提とされており、知覚世界が主題化されることはなかった。メルロ=ポンティは現象学に依拠してこのような即自的な客観的世界を括弧に入れ、地と図という地平構造をもつ知覚世界を主題化したのである。

メルロ=ポンティはハイデガーの「世界内存在」(In-der-Welt-sein)をサルトルのように être-dans-le-monde ではなく、être au monde と訳す。メルロ=ポンティは前反省的な知覚主体を非人称の「ひと」(on)として規定するが、これはハイデガーのいう大衆に埋もれた「匿名の非人称的主体」(Das Man)ではない。それは自然的世界に帰属する生身の身体である。「実存主義の精神に貫かれた自然哲学」という発想は、フランス唯心論の伝統なしには理解できない。

また、ベルクソンはいわゆる無差別の自由を「回顧的錯誤」として批判し、本来の意味での自由を「深層の自我」の動的発展として理解した。メルロ=ポンティはこの点を継承して彼の自由論を展開したが、ベルクソンの習慣の理解を知性的として批判して、自己身体をもって「原初的習慣」とし、さらに「昇華」において生命エネルギーはもはや行動の原動力ではありえないから、フロイトの精神分析学は具体的自由の理論として改造可能であると考えた。同様に、サルトルもベルクソンの直観をもとに絶対的自由の哲学を構築した。しかし、彼の目から見ればフロイトの無意識は自己欺瞞に他ならない。「サルトルはベルクソンに導かれてフロイト批判を行った。これに対して、メルロ=ポンティにおいてはフロイト批判がベルクソンを蘇らせた。」

さらに、メルロ=ポンティは現象学による諸学の基礎づけという構想に与しない以上、彼の哲学を現象学派の一翼に位置づけるのは正しくない。彼はこのような哲学と科学との一方向的関係を批判し、ベルクソンの科学と形而上学の「相互浸透」という観念に依拠することによって、超越論的領野それ自体がすでに一定の構造を有することを認めることができた。メルロ=ポンティはベルクソンのいう経験の具体性と反省の厳密性との総合としての実証的形而上学の忠実な継承者と見るべきである。

すでに述べたように、メルロ=ポンティの哲学をフランス唯心論の伝統との連続性において理解しようとする本論文の基本的観点は十分に理解可能であり、今後のメルロ=ポンティ研究に新しい視点を開示するものとして積極的に評価することができる。また、メルロ=ポンティのベルクソン哲学の継承と展開に関わる議論は清新な着想にあふれ、また相当の説得力をもつと考えられる。

さらに本論文を構成する七章のうち四章は、日本哲学会「哲学」(第二部第二章)、日本倫理学会「倫理学年報」(第一部第二章)などの学会誌に掲載され、すでに一定の水準に達した論文として客観的な評価を受けている。こうした点を総合的に勘案して、本審査委員会は本論文が課程博士の学位を授与するに価するという結論に達した。